詩味礼讃

好詩家たちの対話⑩

ナビゲーター　マーサ・ナカムラ
ゲスト　東　直子

詩人のマーサ・ナカムラさんとゲストとの歓談を通して、詩の味わいや、味わい方の多様さを探る連載「詩味礼讃　好詩家たちの対話」。第十回は歌人であり、小説やエッセイ、脚本の執筆などでも幅広く活躍されている東直子さんをお迎えしました。

傍らに詩歌がある暮らし

東　今日はマーサさんが持っていないかなという本をいろいろ持ってきちゃったんですけど、これは平田俊子さんや三浦しをんさんなどとも一緒に作っている同人誌『エフーディ』です。吟行で作った短歌や俳句、詩で構成しているんですが、vol. 1のときは詩人の平田さん以外では私だけが詩を書いていて、いまのところ私の詩が載っている唯一の冊誌になります。

マーサ　貴重なものを、ありがとうございます。『青卵』（ちくま文庫）に収録された歌人の穂村弘さんとの対談にも吟行の話が出てきましたが、私の場合、ごく個人的なスペースにこもって一人で書くことが多いんです。吟行はもちろんしたことがなくて、複数人で創作活動をした唯一の経験が「しずおか連詩の会」なんですが、そのときは自分の殻を破るために、みなさんがいる中で一生懸命書いた記憶があります。

東さんの第一歌集『春原さんのリコーダー』（ちくま文庫）は、「春原さん」という名前から想起されるイメージもあって、わりと明るい印象を受けたんですが、第二歌集の『青卵』は背後に死の乾いた影を感じました。そのなかに、安徳天皇の歌がありましたよね。

東　「海底に涼しき道は貫かれ安徳帝の足裏（あなうら）おもう」ですね。壇ノ浦の海底トンネルで詠んだ歌で、あれも吟行で作りました。いまでも壇ノ浦というと、波の下に都があると思いながら泳いでいる子どもの小さな足の裏を思ってしまいます。

マーサ　あの歌を読んで、周りに人がいる吟行の最中で、こんなに深い悲しみにまでたどり着けることに驚いてしまったんです。

東　私はみんなでワイワイ作ることに、わりと慣れているというか。

マーサ　東さんが短歌を始められたのは雑誌への投稿がきっかけだったと、『一緒に生きる』（福音館書店）というエッセイ集で書かれていましたよね。入選したことで、子育てで隔絶してしまったと思っていた社会とつながった気がしたともあって、社会との隔絶によって歌人としての東さんが生まれたと考えると、ワイワイ作ることに慣れているのが不思議な気がします。

東　短歌は歌会もあるので、集まって作業をすることがけっこう多いんです。もちろん作るときには自分の世界に没頭するんですが、一人で完結するというより、「これ、どうかな？」と見せ合って意見を言い合うのがスタンダードなんですね。そういうのをわりと早い段階からやっていたので、違和感がないし、ひょっとしたら大学時代に演劇を作っていたときの感覚と似ているのかも。脚本は一応、一人でひと通り書くんですけど、演じながらみんなで変えていくので、そういう共同作業が好きなんだと思います。

そうやってお互いにエモーショナルな部分を高め合ったところで生まれるものも、あったりするんですよね。たとえば『青卵』にある「ママンあれはぼくの鳥だねママンママンぼくの落とした砂じゃないよね」という歌は、なぜあの歌が出てきたのか自分でもわからないんですが、みんなで海辺でワイワイやっているう